

[06] Crossover

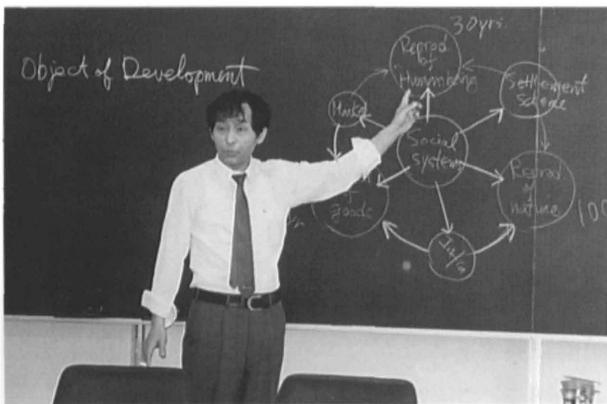
<https://doi.org/10.15017/19343>

出版情報 : Crossover. 6, pp.14-23, 1997-06. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン :
権利関係 :



自己紹介

余語トシヒロ
(地域構造講座)



自己紹介といいますがまず頭に浮かぶのが姓名と職業でしょうか。職業との関わりはほとんどが海外ですが、それに比べ日本社会での自己紹介ほど苦痛なものはありません。まず名古屋に百数十軒しか残っていない姓の由来にはじまり、さらに名前が戸籍上カタカナである理由を理解していただくためには、私の苦手とする比較社会文化的説明を強いられます。

かつては何を職業としているかを説明するのも至難の業でした。職業とは専門の対象とそれに関わる方法でしょうか。私は長い間、農村開発にコンサルタントとして関わってきましたが、30数年前の日本には開発という言葉もコンサルタントという言葉も一般用語としてはありませんでした。言葉がないのに説明のしようもありません。コンサルとは仕事(お座敷)がかかればどこへでも行き、どんな要望(芸当)にも答えてみせねばなりません。そこで窮余の策として芸者をやっていますと応え、いつもひんしゆくを買っていました。私は芸者としてプロの技に誇りを持っていますし、日本の社会と文化を考えるとこれ以上の説明はないとおもいます。それでもまとも理解されなかったことから比較社会文化論の妥当性を今でも疑っている次第です。

こうなりますとなぜこの期に及んで比較社会文化研究かということになってしまいます。私は農学を専攻したのですが、23歳から約10年、遊牧民の定住化、小作農の自作化、農奴の生産近代化、反共政策

の下での共産的方法による農村開発、という具合に常に相矛盾する設定に直面し、自分の専門についてもつい疑いを持つ結果となってしまいました。考えてみますと、私の学生生活は戦後成長の真っ只中で、農業は「天」と「地」の自然関係で決まり、その間にある「人」を無視した教育を受けてきました。しかし実際は人とそれを取り巻く社会・経済・政治・文化によって決まるということに30歳前半になってようやく気づいたわけです。当時の大学院は一度社会に出た者には閉鎖的でした。そこで国連の研究機関に潜り込み、みよう見まねで社会学を勉強してきたわけですが、幸か不幸か世界各地の農村社会から学ぶ機会が多かったものですから、専門の先生からみると邪道と言われかねない農村社会の比較視点と分析方法を身につけたまま現在に至ってしまった次第です。

幸い芸者も年増となりとうが立ってきますとお座敷の種類も芸の内容もこちらで選べるようになり、40代の末頃からはお客様の要望にも馬耳東風、発展過程における農村の社会的機能をいかに評価し開発戦略の中に位置づけていくかを勝手に演じている次第です。しかし単なるお座敷芸に終わらずもう少し社会のお役に立つためには、開発過程における普遍性と個別性の問題、マクロとミクロの課題、期待と現実の差などなど多くの問題に応え、農村社会を今までの形態や生態的側面からではなく発展機能という生理的側面から類型化するという大それた課題に立ち向かわねばなりません。

本研究科に参加させていただく機会を得て、今後は自己紹介のための比較社会文化論を卒業し、開発研究の方法論として比較社会文化論の研究に邁進していきたいと考えています。よろしく願います。

地震とつきあって20年

谷口 仁士
(地域構造講座)

本年、4月1日より地域構造講座の客員教授として着任しました。地震工学、地震都市防災工学を専門として、約20年間地震を追っかけています。1978年宮城県沖地震が初めての被害調査でした。その後、1983年日本海中部地震、1984年長野県西部地震など、地震が発生する度に現場に出かけ調査・分析の毎日でした。特に、日本海中部地震で発生した津波が東北地方の日本海沿岸を襲い、遠足に来ていた小学生13名を含む100名もの尊い人命が津波の犠牲になり、自然の脅威を前にした人間の脆さを痛感したことは今でも鮮明な記憶として残っております。

この地震をきっかけに、「地震防災は人命を救うことであり、Hard 的な対応だけでは限界がある。今まで研究してきた知識を分かりやすく説明する義務がある。」との反省に立ち、今まで行ってきた Hard 的な研究の他、小・中学校の教員を対象とした“防災教育”の研究に着手し、昨年、「Quake Busters」と称するコンピュータを用いた「地震防災教育教材 (CD-ROM)」を完成させました。アニメや音楽を取り入れた子供向けのバージョンと地震発生の知識や対応などを盛り込んだ大人向けバージョン（両方とも日・英）から構成されたものです。



メキシコにて、1993年

1991年、国際協力事業団 (JICA) から南米のペルーに地震防災の専門家として赴任しましたが、着任4日後、同じ JICA から派遣されていた農業関係の専門家3名がテロによって殺害され滞在約1ヶ月で帰国しました。帰国後、メキシコ市の国立防災センターに赴任し、メキシコの研究者と2年間メキシコ市の地震動特性などを考慮した地震都市防災の研究に従事しました。メキシコでは研究の傍ら（ラテン系の人たちは日本人ほどがむしゃらに働かないので時間は沢山ありました）マヤ、アステカ文明などが残した古代遺跡の探索と趣味の写真を撮り、今では、唯一の貴重な財産として大事にしております。

1993年末にメキシコより帰国し、現在の国際連合地域開発センター防災部門に籍をおき、地震災害が発生すると国内外を問わず現地調査に出かけています。最近では、コロンビア、中国、イランで発生した被害調査に現地の研究者と同行し、災害軽減に向けての討論などをしております。また、国連が推進している「国際防災の十年」プロジェクトの中で、発展途上国を対象とした大都市における地震被害危険度評価方法の開発を行っております。国内では1995年阪神・淡路大震災が残した多くの都市防災の問題を追究しております。この地震は、ご存知のように国内外に大きな衝撃を与え、多様化した大都市における地震防災の難しさや復旧・復興に関わる多くの問題を提起しています。

現在、「国際防災の十年」プロジェクトの一環として、阪神・淡路大震災が残した問題である社会・経済的構造の視点から、既往の地震災害も含めた被害分析を行っております。この問題は被災地域の社会構造や経済構造を分析することで、今まで考えていた Hard 的側面からの脆弱性ばかりでなく Soft 的側面からの脆弱性も明らかにできると思っております。

自己紹介

鐘ヶ江 秀彦
(地域構造講座)



今年度4月より連携講座の客員助教授として着任しました。現在は国連地域開発センターで、計画技術開発部門の研究員でもあります。専門は、計画理論、とりわけ複合型都市開発計画論です。一般的に理工学系大学の場合、学生は必ず研究室に所属します。私の場合は、工学部でしたが、大学3年次のころから同じ研究室に計9年間所属し、何かをつくりあげる(工学する)ために、ほかの全てを捨てて、区切りがつくまで(成功して完成する場合もあれば、失敗して落ち込むこともしばしばでしたが...)開発の場にとどまるという、そこでの生活になじんでしまいました。そのためか、一旦何かを始めると、夢中になり、徹夜続きもなんのその、そのほとんどを昼夜関係なく研究室で過ごすことが身につけてしまっています。この原稿を書いている2日前まで、同じ状況を国連地域開発センターでもやってしまいました。さすがに社会人ともなると職場で何日も寝泊りは許されませんが、それでも4・5月は、連休も休日もなく、毎日、ひどいときは早朝4時位までゲーミング・シミュレーション開発を行っていました。ゲーミング・シミュレーションとは、ゲーム理論とは別ものですが、ゲームを通じて何かを学習しようという、研修・教育用の体験学習のツールに、シミュレーションが組み込まれており、ゲーム参加者の何らかの行為や意思決定の結果が、その後のゲームにフィードバックされる要素を持ったゲームを行うというものです。国際連合地域開発センターでは、「REPLEX (Regional Planner EXercise)」というゲーミング・シミュレーションにつづき、地域開発のトレーニング教材として、開発途上国の持続可能な開発(サステイナブル・ディベロップメント)を学習できるゲーミング・シミュレーション『PANGAEA』を開発してきました。PANGAEAとは、地球全体という意味で、現在の7大陸に別れる前のひ

とかたまりの大陸の名称です。このゲーミング・シミュレーションは、プランナーの教育を前提としており、その教材として、参加プランナーにとって必要かつ有益な情報を盛り込むことが意図されています。開発にあたっては、20年先にわたる国づくりを想定し、計画を立案するゲームを通じて、開発推進と環境保全の相互均衡を保ちつつ、持続可能な国づくり、すなわち、開発を通じた社会的・経済的成長の達成と自然環境保全・環境負荷の低減といった点も考慮しつつ、長期にわたった健全な国づくりを通じて、あらゆる意味で国が発展することを体現し、学習し得ることを目的としました。1994・1995年には、プロトタイプマルチメディア・ゲーミング・シミュレーション『PANGAEA version 1』をMacintoshをプラットフォームとして開発し、フィリピン大学におけるTRANSMEX研修にてこれを行いました。1996年は、イントラネットに対応したサーバー・クライアント型マルチメディア・ゲーミング・シミュレーション『PANGAEA version 2』をIBM互換機をプラットフォームとし、Windows NT ServerをOSに開発を行い、1996年10月16日から28日の13日間、ロックフェラー財団と沖縄県により沖縄大学において開催された「環境と開発の指導者養成研修 (Leadership for Environment And Development: LEAD)」にて、10月22日から27日まで、担当しました。なお、156人もの参加者による大規模なゲーミング・シミュレーションは世界でも例を見ないものです。また、今回の沖縄研修の反省を踏まえ、今回開発した『PANGAEA version 3』も、1997年の国際研修コースに用いており、インターネットに対応し、平成7年の5月23日より30日まで、40名が参加する国際研修にて実際に使われました。このゲームは、インターネットのWebページ(<http://www2.uncrd.or.jp>)で見られます。是非一度ご覧ください。

野生動物保護管理学

— 生息数を調べ個体群保全への最適解を求める —

米田政明

(地域資料情報講座)



日本にはどれくらいの野生動物が生息しているのか？ツシマヤマネコの個体数は100頭前後、ヒグマは2,000頭、ニホンザルは8万頭から20万頭、などの推定があります。

この生息数はどのような要因で規定され、またどのように変動しているのか？動物の正確な個体数を求め、その変動を分析することは、単純なテーマですが難しい課題です。示した3種の正確な生息数も実際のところまだわかっていません。しかし、概数でも個体数がわからないと、地域個体群の評価と保護管理を進める上での目標設定ができません。動物の個体数はどのように決まっているのか？研究はこの興味から始めましたが、現在は人と動物、特に哺乳類の種・個体群の保護管理に関わる調査研究を主な課題としています。

動物個体数に関わる課題として、これまでにヤマネコ類の概数などを調査するとともに、ヒグマ、キツネ、シカなどの捕獲個体を材料に、年齢構成・生命表分析を行い、ヒグマの生態的寿命は25歳程度、エキノコックス対策のための捕獲はキツネ個体群の若齢化をもたらしたこと、などを研究してきました。個体群分析のため、哺乳類の歯根部の年輪構造観察法の改良を進めてきましたが、年齢だけでなく歯牙の微細構造の物理・化学的分析による、繁殖歴など個体歴の総合的分析への応用が今後の課題です。

動物相互間の生息数に関わる課題としては、ゲッシ類とキツネを主とした捕食者の関係に注目して調査し、キタキツネは地域のゲッシ類個体数の20%ほどを捕食すること、アカネズミ類よりヤチネズミ類が捕食されやすいこと、最大積雪深や草丈などの季節的变化が関わること、を明らかにしてきました。

動物個体群分析、地域の種構成・種間の資源利用差の研究では、これまでの研究として述べたように興味ある課題がまだ多くありますが、「人と野生動物の共生」のための有効な保護管理を進める上では、土地利用のあり方や持続的利用のための政策提言と、その背景として生息状況評価のための生息数調査や生息地評価精度の向上に関わる応用的な調査研究が重要です。今後は、基礎研究分野でやり残している課題と、野生動物資源の持続的利用を含む地域生態系の生産性・種多様性維持を基本とした人間の土地利用、野生動物の保護管理がどうあるべきか一人と動物のあり方の最適解を探ることをテーマとした応用的な研究課題に、大学院生とともに取り組みたいと考えます。

しかし、キツネに捕食されることの少ないアカネズミ類の個体群はどのような要因で規定されるのか、またヤチネズミ類でもどんな個体特性を持ったネズミが捕食されやすく、それがゲッシ類と捕食者の個体群動態にどのように作用しているかなど、多くの課題が残っています。

地域の種構成と種間の資源の利用わけ研究分野では、南米大陸の熱帯林に生息する霊長類を対象し、果実・葉食性で腕渡り移動タイプのサルは一般に高木層の利用が、昆虫・小動物捕食が多いサルは森林下層でジャンプ型の移動が多いことを見てきました。しかし、霊長類の種構成は地域ごとに異なりその森林利用の差も多様です。地域の種構成・種間の資源利用の違いを、森林の歴史的变化—氷期の熱帯林縮小・構造変化とその後の回復と関連づけて研究することが今後の課題です。

動物個体群分析、地域の種構成・種間の資源利用差の研究では、これまでの研究として述べたように興味ある課題がまだ多くありますが、「人と野生動物の共生」のための有効な保護管理を進める上では、土地利用のあり方や持続的利用のための政策提言と、その背景として生息状況評価のための生息数調査や生息地評価精度の向上に関わる応用的な調査研究が重要です。今後は、基礎研究分野でやり残している課題と、野生動物資源の持続的利用を含む地域生態系の生産性・種多様性維持を基本とした人間の土地利用、野生動物の保護管理がどうあるべきか一人と動物のあり方の最適解を探ることをテーマとした応用的な研究課題に、大学院生とともに取り組みたいと考えます。

現場での経験を伝えたい

石井 信夫

(地域資料情報講座)



本年4月から連携講座（地域資料情報）の客員教授として本研究科の研究教育活動の一端を担うことになりました。専門は哺乳類学と野生動物管理学です。大学で教える立場に身を置くのは実に

久しぶりのことなので、きちんと役目が果たせるか少し不安に思っています。現在つとめている所（自然環境研究センター）では、主として中央官庁や地方自治体からの委託事業という形で、希少種や重要自然地域の保全策あるいは農林業被害をもたらす野生動物の管理策を検討するための基礎調査、野生生物保全に関わる政策立案のための既存情報整理などを主な内容とする仕事をしてきました。いま直接担当しているプロジェクトには、奄美大島の生物多様性保全やマングース駆除、対馬のヤマネコ保護など九州地方に関係するものもいくつかあります。こうした仕事が大学でのものと異なるのは、調査研究の成果が現場での問題解決にすぐにどれだけ役立つかが厳しく問われることだと考えています。

これまで手がけてきた仕事の具体的内容は様々ですが、学生時代の専攻が林学だったこともあって、野生動物とその生息場所とくに森林環境との関連を一貫した研究テーマとしてきました。野生動物を保全するには捕獲禁止や個体数調整をはじめとする個体群の直接的な管理とともに生息場所の管理が重要ですが、後者の観点からの調査研究や管理活動はあまり盛んではありません。1994年には、そうした現状を改善するのに役立つかと思い、森林性鳥獣の生息環境保護管理に関する考え方と方法を本にまとめました。また、海外での調査事業に携わることも多く、主に東南アジア諸国で自然保護地域の野生動

物調査などを行ってきました。とくにマレーシアとは1988年に初めて訪れて以来つきあいが長く、熱帯林に生息する小型哺乳類の生態に関する研究を継続していますし、国立公園の生物多様性保全計画を検討するのに必要な情報を現地調査によって収集しGIS（地理情報システム）を用いて分析するプロジェクトも今年から始めました。

ほかに私の仕事の中で大きなウェイトを占めるのが「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」、通称ワシントン条約です。この条約の締約国会議には、1989年の第7回から、92年、94年と3回にわたって日本代表随員（環境庁アドバイザー）として出席し、92年から94年までは条約動物委員会（動物に関する条約実施上の技術的問題を扱う委員会）のアジア地域代表もつとめました。この6月にジンバブエの首都ハラレで開催される第10回締約国会議にも参加します。こうした経験を通じて、野生生物保全問題の社会経済的側面、とくに開発途上国の置かれた困難な状況などを知ることができました。また、各国政府の姿勢や環境NGOの実態など、深く関ってはじめて見えてきたこともあります。

官公庁からの委託事業を年度単位でこなしてゆくという仕事の性質上、調査研究の継続性を保つことが難しかったり、必ずしも自ら進んで係わったのではないことも多いのですが、振り返ってみれば望んでも容易には得られない貴重な体験が多かったと思います。今回の連携講座に加わることは、現場での様々な経験やそれを通じて考えてきたことを皆さんにお伝えし、また皆さんとの討議を通じてあらためて考え直す大変よい機会だと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

着任に際して

齊藤 千映美

(地域資料情報講座)



風が吹くたび部屋中が砂だらけ、読みかけの本も食物もベッドも赤い土でうっすらと覆われてしまう、そんな所に住んでいたことがあります。

1991年のマダガスカルです。

空は青く、風は熱く、河も砂と乾泥の道に変わっていました。何もかもざらざらに乾いた熱い土地でした。集落を通るたび、村人は小屋の日影で身を起こして眠い目で声をかけて来たものです。暑さだけは貧しい人にも外国人にも平等に訪れ、人々は来る日も来る日も昼の間は動かずにエネルギーを節約しているようでした。私は島に固有の霊長類の生態を乾燥林で観察していましたが、無茶な話でした。緑と茶色のサボテン状の木々の間で、サルは日陰を作るわずかな枝の間にうまくはい込んで、5時間も6時間もじっとしているのです。その間、ざらざら輝く太陽とともに移動する座布団ほどの大きさの木陰に身を寄せ続けることもしばしばでした。けれど、喉の渇きも立ち上る熱気も、慣れてしまえばそれほど苦痛ではありません。判で押したような毎日はいつまでも続くように思われました。

ある日、白い雲が青い空を流れました。次の瞬間、雨粒が林を叩き始めました。林中が振動するような豪雨でした。息を呑む間にデータシートは濡れ、服はぐっしょりになったのですが、私の肌はあまりの気持ちよさに水中に戻った魚のように喜んでいました。地表から立ち上る焦げ付くような空気は降り注ぐ水滴に冷やされ、鼻や口に入ってくる乾いたちくちくする埃はあっという間にたくさんの匂いに満ちた柔らかな空気にとって代わられました。帰り道、森の風景が一変しているのに驚きました。すべての植物が水に包まれて色を変え、にじんで萌え立ち、香り、いっせいに潤いのある輝きを発しているのです。集落を通りかかると、私を呼びながら男が飛び出してきた、雨の中で踊りはじめました。私も踊りだしたい気持ちでした。いつもは陽炎を追いかける

長い赤い土の道が見知らぬ豊潤な大地に見えました。振り返ってみて、厳しい気候の国に生きる人々・動物・植物が雨季を待ち焦がれる気持ちは、その場で体験してみないと簡単に理解できるものではないというのが私の感想です。

彼らは逆にそうした気候をうまく利用するための見事な戦略を備えていることも少しずつわかって行きました。自然やそこに生活する生物の特性は、その土地の地史的な条件や、そこに生きる生物の背負う歴史とによって異なるのです。生き物はどんな風にその環境に適応しているのか？彼らに必要なのはどのような環境か？土地の人々は自然とどんな関係を築き、何を必要としているのか？その地域に固有の状況を見落としていないだろうか？地域の自然が持つ特異性やその保護を考えると必要になる理解は、文字情報だけでなく、時間をかけたフィールドワークを通じて得られることが多いと思います。それが必要でなくなるのは、自分の体が動かなくなったときでしょう。当たり前のことですが、人間生活と自然の動きを察知する感覚、常に新たな体験と視野を求める好奇心は、自然保全のための資料を解析するとき、技術や知識と同様、あるいはそれ以上に大切な能力です。現在、野生動物の保護管理に関わる各種の公的調査に取り組んでいますが、責任のある仕事ゆえ、目先に捕らわれず自然と人間を理解することの大切さ、自分を常に新たな方向に向けていく必要性を絶えず考えさせられています。4月から同時に研究科のスタッフとなりました。教官・学生を問わず、多くの方々と新鮮なものの見方や体験を分かち合いたいと願います。優れた研究者を輩出してきた九大の、さらに多様な研究者の集団であるこの研究科に参加できたことを光栄に思うと同時に、知的刺激と意外性に満ちた出会いを楽しみにしています。どうぞよろしくお願い致します。

福岡に帰って

林 秀 司

(地域構造講座)



地域構造講座助手の林 秀司と申します。筑波大学の自然学類および大学院地球科学研究科で人文地理学を学び、昨年11月からは同じく筑波大学の地球科学系に技官として勤務していましたが、4月1日よりこちらにお世話になることになりました。

私は福岡県浮羽郡田主丸町の出身で、大学に進学するまではずっと田主丸町で暮らしていました。それで、筑波大学からこちらに転任が決まると、私が福岡県出身であることを知る人たちは「郷里に帰ってよかったね」と言ってくれましたが、私は、最初、自分の郷里はあくまで田主丸町であって、福岡市のほうに赴任するのを「郷里に帰る」とははいえないと思っていました。しかし、福岡市は田主丸町から自動車ですらせいぜい2時間程度。これまでも天神や博多には年に数回は来ていて、少しはなじみのある町だったわけですし、福岡市に住み始めて約2か月たち、ここでの生活にもようやく慣れてきた今、なるほど、これは郷里に帰ってきたようなものかなと思えるようになってきました。

さて、私の専門は人文地理学の中でも農業地理学あるいは農村地理学です。短い研究歴ではありますが、これまでいくつかの農業地域(とくに園芸農業地域)の形成と変容に関する研究を行ってきました。園芸農業地域を研究していると、例えば、スプリンクラーの普及が砂丘地農業の発展要因となったり、ダイコン産地では品種の更新が連作障害を回避するひとつの方策となっていたり、ミカン産地はミカンの

収益性低下への対応策としてキウイフルーツを導入したりと、新しい農作物や品種、技術が農業地域の形成と維持・発展に大きな要素として存在していることがあります。私はこのような新しい農作物や品種、技術を農業イノベーションととらえています。イノベーションが地域的に広まる(普及する)という現象—それは勝れて地理的な現象であると考えているのですが—は、採用者(農業イノベーションにおいては農家や農家組織)によるイノベーションの採用の結果であるといえます。そこで、私は農業イノベーションがどのように農業地域の農家やその組織に採用され、地域的に普及するかを明らかにすることをおもな研究テーマとしています。

現在は、とくにイチゴの品種を取り上げて研究しています。日本のイチゴの栽培品種は1980年代に大きく変化し、関東地方から東海地方を中心に「女峰」という品種が、九州地方を中心に「とよのか」という品種が普及しました。そこで、私は栃木県足利市で女峰の、福岡県広川町でとよのかの普及過程の調査を行い、両地域の比較検討を試みているところです。とよのかの産地、福岡県に帰ってきたことから、さらにこの研究を深められたらと思っています。

以上が現在私が取り組んでいる研究ですが、最近ではイチゴ以外のいくつかのアイテムにも興味を持っています。そのひとつが環境保全型農業—福岡市の減農薬米運動は有名—です。近年にわかに農業・農村の持続性が喧伝されるようになった感がありますが、持続的農業のひとつの要素といえる環境保全型農業は地域にどのように受容され(普及し)ているかについての研究も行いたいと考えています。

おっとりとした性格の人間で、複数の仕事を同時進行ではこなせない不器用な私ですが、ここ福岡でも取り組んでみたいテーマはたくさんあります。ひとつでも多くの成果をあげたいものだと思っています。皆様、ご指導の程よろしく願いいたします。

自己紹介

栗栖 薫子
(欧米社会講座)



97年4月 から国際社会文化専攻・欧米社会講座の助手として着任しました。今年の3月に東京大学大学院の博士課程を修了し、福岡に来て二ヶ月近くが過ぎようとしています。適当な広さで活気があ

り、しかし混みすぎない街、高すぎない物価など、当地の生活環境面の大部分について（水の出が悪いこと以外）ほどほどに満足しています。また、自動車や自転車の運転の荒さにも何とか無事慣れ、利用してみると意外と便利なバス路線もうまく乗りこなすことができるようになりました。

赴任して以来ご近所の人からはよく「幼稚園の保育さんか、小学校の先生でしょ」といわれますが、専門は国際関係論です。学部時代にはドイツ語を学ぶ一方で、現国連難民高等弁務官の職にある緒方貞子先生から国際関係論の手ほどきを受けました。緒方先生がジュネーブ赴任となったため、修士課程からは数理政治学と国際政治経済学を専門とする山本吉宣先生の下で、「君、本当に何も知らないけど大丈夫？」と優しくも厳しくも叱咤されながら、徐々に国際関係論の何たるかについて学びはじめました。

現在取り組んでいるテーマは、(東西)ヨーロッパの国際政治や安全保障に、特に冷戦構造の変容と終焉に対して、人権・人道といった規範や、こうした規範を実現することを意図して形成された国際制度がどのような影響を与えたのか、というものです。人権や民主主義といった国際的な規範が受入れられ

ていく過程での国際的な諸制度（レジーム）の役割、あるいはNGOなどの非政府行為主体の役割、また国家を中心とした行為主体の利益やアイデンティティは所与ではなく国際システム（構造）との相互作用によって形成され変化し、それらがまた（冷戦期の）国際関係の変容に重要な影響を与えたことについて示します。そのために、ヨーロッパのデタントの過程で重要な役割を果たした欧州安全保障協力機構をめぐる政治・社会動向をとりあげました。関心を持っているもう一つのテーマは、冷戦後の安全保障を見る視角として、18世紀以来のリベラルな諸理論（commercial liberalism, republican liberalism など）を今日的に改めてとりあげて評価を行う、というものであり、このテーマでも論文を執筆中です。双方の論文において、国際政治を静的なものとしてとらえる一部のリアリズムへのアンチテーゼとして、間主観レベルでの規範の共有や紛争解決制度の定着など、平和的変化の可能性を一貫して主張したいと思っています。

さて、博士課程在学中には学問的関心とは別に仕事として、図らずもいくつかの政策志向型シンクタンクプロジェクトに関わってきました。最初の二年間は日米共同研究と国際会議のコーディネーターとして働き、その成果は西原・ハリソン編『国連PKOと日米安保』として日米両国で出版されました。また四年間にわたって「国連政策」研究や「アジア諸国における人権」研究などにもかかわってきました。昨年度は、国連大学が主催する「世界NGO会議」の準備段階に参加し、その報告書が近日公刊されます。こうした少々の経験を通して考えざるをえないのは、国際関係論の学問的研究は、通常それが独立した研究対象として見なしている現実の国際関係と分離可能なのか、その中で研究者はどのような立場をとるべきなのか、という問題です。当分の間は視野を広げることに努め、こうした課題についても考えていきたいと思っています。

Tasiujaq to Fukuoka: From tundra to palm trees

Bradley Sinclair

(地球自然環境講座)



I would like to thank all the people involved in recruiting me for this position and for helping me in my adjustment to a new culture. I have been so warmly welcomed by everyone I have met. This is my first time in Japan. I arrived here from the subarctic region of northern Quebec (Canada), where I was living for the past year with my family in the Inuit village, Tasiujaq. This is a fly-in community of about 180 people and my wife was teaching Inuit children in the local school, while I remained at home as full-time caregiver to our year-old daughter. I was able to set up a laboratory at home, and although facilities were not what would be found at a university I was able to continue taxonomic projects.

My primary research interest is the study of biological diversity, including the description, origin, and maintenance of species richness. Fundamental to this is the investigation of phylogenetic relationships and their use in interpreting ecological patterns, using any appropriate methods. My specific research interest is systematics of flies (Diptera), particularly the dance-flies (Empidoidea) and seepage-flies (Thaumaleidae). My research focuses on the fauna of aquatic habitats, including seepages, rocky streams, creeks, and rivers, primarily confined to mountainous or hilly regions. Future research will continue to focus on aquatic habitats and include revisionary studies on a number of genera of the subfamily Clinocerinae.

I was raised in the southern portion of the province of Ontario in Canada, near the large

city of Toronto. I completed my PhD at Carleton University in the capital city of Ottawa, but spent most of my time in the laboratories of the nearby Canadian National Collection of Insects. My thesis examined all world genera of the aquatic dancefly subfamily Clinocerinae, and also focused on the North American species of two genera.

Following my degree I took up a postdoctoral fellowship at the Australian Museum in Sydney, Australia. I chose Australia to undertake a phylogenetic and zoogeographic analysis of the "Trans-Antarctic" or Gondwanan dancefly subfamily Ceratomerinae. This group appears ideal to test patterns of continental drift and evolutionary studies of the relationships between the fauna of Australia, New Zealand, and southern South America using cladistic methodologies. During my nearly two years in Australia, I collected thousands of specimens of flies (both adults and larvae) from the streams, creeks, and waterfalls of eastern Australia from Tasmania to Cairns. In addition, I travelled to New Zealand and New Caledonia for brief collecting trips in search of additional species of Gondwanan flies.

My research interests and experiences have taken me to many regions of the world to study at museums, attend conferences and undertake field work. Some of my most memorable experiences include a 3-month research trip to the Galapagos islands, my first international Dipterology congress in Bratislava, Czechoslovakia, collecting trips to the rainforests of Costa Rica, mountain streams of New Zealand and Australia, and a short but productive visit to the California Academy of Sciences in San Francisco, USA.

I eagerly look forward to many new experiences in Japan for my family and me.

日本社会文化専攻

井 手 靖 子	日本人の天皇観 一本島等前長崎市長への手紙の分析を手がかりに
オウ 王 ウン 雲 エン 燕	二十年代の中国文学における日本文学の受容 —「小説月報」「語絲」を中心に
おお 大 すぎ 杉 たく 卓 ろう 三	「高度情報社会と地域情報化政策」 —ニューメディアを中心として
おお 大 もり 森 まどか 円	古墳時代後期群集墳の造墓集団
おか 岡 の ひで 秀 ゆき 之	わが国における国際航空物流の空間構造
お 小 がわ 川 よう 洋 こ 子	ポスト近代社会におけるフェミニズムの可能性 —ポストモダン・フェミニズムの理論と展開—
か 加 じ 治 よう 陽 こ 子	マレーシアにおける経済発展と民族間関係 —多民族国家における発展形態の一事例—
かた 片 やま 山 かよ 佳 子 普子	長崎外国人居留地におけるMunicipal Councilについて
かわ 河 た 田 かず 和 こ 子	「横光利一の思想戦」 —近代の超克と昭和の知識人—
しま 島 ぎき 崎 みみ 史 か 佳	「自己呈示としての「名付け」 —文字表現の分析から—
ジ 時 エン 艶	外国投資と中国民族経済発展についての分析と展望
たな 棚 はし 橋 まどか 円	男性運動の思想とその可能性— ジェンダー・スタディーズの発展に向けて—
たわら 俵 かん 寛 じ 司	雲南滇王国の社会構造とその変化過程に関する考古学的研究 —墓地資料から見た中国西南部古代部族社会研究の一事例として—
チエ 雀 ジュン 鐘 ヒョク 赫	韓半島南部海岸地方の新石器文化の研究
チョウ 張 キ 毅	中国の国有企業改革の課題と展望について —大・中型国有企業改革を中心に—
の 野 もと 本 やす 泰 こ 子	産む性と女性文学者 —結婚と自己実現の両立への可能性 佐多稲子論—終戦時までの女性的側面を中心として
ば 馬 ば 場 よし 芳 ゆき 之	日本産ライチョウ類の遺伝的多様性と保全
フウ 封 セイ 静 イ 宣	志賀直哉研究 —沈黙期(昭和4年から同7年まで)以後の志賀文学—
ふじ 藤 おか 岡 けん 健 太郎	「道義」的秩序観の形成 —戦前期日本知識人の国際秩序認識と「東亜新秩序」—
ふじ 藤 わら 原 けい 恵 こ 子	マンガ同人誌と友人関係 —同人誌即売会に集う人達—
ブリヤンタ・リヤナゲ	Mitochondrial DNA analysis of Asian Elephants using feces of <i>Elephas maximus</i> in Sri Lanka
や 矢 の 野 けい 桂 こ 子	「幕末維新期における長州藩討幕派の運動とその展開」 —高杉晋作の分析—

国際社会文化専攻

いけ 池 だ あき ひこ 暁 彦	時事英文における名詞句表現の研究
いし 石 かわ 川 り 理 え 恵	外国人英語指導助手(AET)の異文化適応
い 伊 とう 藤 み 実 ゆき 雪	元雑劇悲劇論 —大団円への趨勢
いの 井 うえ あ 古 上 亜 古	オドリバエ科 <i>Rhamphomyia</i> 属の配偶行動の比較行動学的研究
いの 井 うえ ち 智 佐 代	18世紀末 イギリスの茶事情 —“The Tea Purchaser's Guide” を題材として—
いかい 祝 ひで 英 あき 明	「雑誌に見る新時期中国都市部に於ける家族の諸問題 —「中国婦女」「中国青年」の分析を通して—
おか 岡 やま 山 ち え 智 英 子	近代イギリスにおける風景の変容とピクチャレスク美学
かた 片 おか 岡 たつき 樹	東南アジアにおけるキリスト教受容の理解についての試論的考察 —タイ国の山地「少数民族」の事例の検討から—
きた 北 み 美 ゆき 幸	アメリカ合衆国における反ユダヤ主義 —1920~40年代のユダヤ人学生制限策を中心に—
しもこう 下 河内 み 美 わ 和	クスノキの樹勢に及ぼす生育環境の影響評価に関する研究
しも 下 わき 脇 とし 利 あき 頭	太陽光発電普及の意義と課題
すえ 末 まつ 松 のぶ 信 こ 子	Jane Austen の英語 —歴史・社会言語学的研究
すえ 末 よし 吉 まさ 昌 ひろ 宏	A revision of the genus <i>Tephritis</i> (Diptera : Tephritidae) from Japan 日本産 <i>Tephritis</i> 属の分類学的再検討
たち 館 たく 卓 じ 司	A systematic study of the genus <i>Actia</i> Robineau-Desvoidy of Japan (Diptera : Tachinidae)
なか 中 しま 島 み ほ 美 穂 子	現代アメリカ英語における誓言の研究
なか 中 やま 山 とおる 徹	第1回国際東洋学者会議における日本論について
なが 永 い 井 り 紗	中国清末より始まる鴨緑江流域の伐木業について
の 野 むら 村 けい 啓 じ 二	古代東アジアの冊封体制の形成に関する一考察 —4~5世紀を中心として—
まつ 松 お 尾 ゆう 優 こ 子	「子ども」という語り —日本の1980年代における、「子ども」という語りの一考察—
みつ 光 もと 本 のぶ 伸 え 江	大分県湯布院町における「まちづくり」運動と地方自治の可能性
みや 宮 はら 原 かず 一 なり 成	William Golding 作品におけるフィジカルティ —身心問題に対するゴールディング的アプローチ—
よう 葉 てる 照 こ 子	「日独文化関係の中の鹿子木員信の活動について —1920年代を中心に—